山崎郷土研究会報

NO. 103
16.4.20

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話62－2000

目　次

①〈地域史随想〉北播磨の紙漉き業
—杉（椙）原・海田・都多杉原の紙屋—　宇野　正碆　1
②川東古道　下村　哲三　10
③兵庫県宍粟郡山崎町野字塚之元の経塚から出土した「上方作」獣帯鏡（東京国立博物館所蔵）について　片山　昭悟　15
④秋の研修旅行記　森本　一二　22
⑤山崎町中井・段地区
埋蔵文化財確認調査について　教育委員会　25
⑥事務局だより　28

〈地域史随想〉北播磨の紙漉き業

—杉（椙）原・海田・都多杉原の紙屋—

宇野　正碆

一、「賀眉（かみ）の里」は「紙」に通ずる。

『播磨国風土記』の託賀郡の里名に「賀眉」がある。本来上流にあるから上（カミ）と名付けたが、時代が遷り町名をつけるとき発音が似通うから「加美町」となった。この町は古来から和紙の生産で有名なので、上（カミ）＝紙（カミ）と重ね合わせ優雅な文字「加美」となったのだろう。この加美町の主な谷は杉原谷で、ここで生まれた紙は『杉原』『スギハラ』と言えば紙の代名詞となり、国内どこで漉いてもスギハラ＝杉原紙で通り、さまざまな略称も生まれた。七・八世紀にすでに「播磨紙」と都で呼ばれたのは「杉原紙」のことだと思われていた。

この播磨紙は官衙の記録・伝達の用紙として、また寺院の写経、佛典印刷の用紙などに使用されて来た。しかし、播磨のどの地方の産物か不明のまま年月を経ていた。先学達の長年の研究結果、播磨紙は杉原紙＝椙原紙であることが判明した。新村出氏や寿岳文章氏の名は忘れられないし、若くして戦没された堀部氏の功績は大きい。また『杉原紙』の著者藤田貞雄氏もわれわれに蒙を開いて下さった。

播磨紙＝椙原紙＝杉原紙であることの証左は『殿暦』（承久四年〔一一一六〕関白藤原忠実日記）にある。読み下すと、

「七月十一日（壬寅）天気晴、早朝に院に参り召されて御前に

参る。（中略）姫君の倉に納めたのは調度一具（中略）と鞍一具、銀地葦手で私が新調したもので、それと椙原庄紙を百帖でした。」

とある。この一文が播磨紙が杉原紙であることを証明した。一帖は五十枚、百帖は五千枚である。使途は前にも述べたが、外に貴族たちの日記用、文学作品用など枚挙に暇がない。鎌倉武士たちも記録・伝達に使っているが、貴族、武士たちの間で利用価値が高かったためであろうが、贈答品として随分と動いている。

杉原一束（五〇〇枚十帖）を二つ折りに交互に折り重ね、水引で結び、上に扇子一本を添えて献上、相互交換するのが儀礼化していた。

杉原を称する紙は全国各地で漉かれ、土地の名を付けて「〇〇杉原」の名も生まれた。杉原谷村の紙が有名であるのは、ここが近衛家の領地であったからだといわれる。

江戸時代には幕府代官所の方針が植林政策となったことが、衰退の原因でもあり、ほかに妙見山麓の銅鉱の開発が一因となり、「村明細帳」を見ても紙漉役銀を納める村は轟村（銀十八匁）吉右衛門、西山村（銀六匁）。丹治村（古検銀五匁）。大袋村（銀五匁）（加美町史史料編には見えず）。豊部村楮役壱畝弐歩（所々取集め）二升五合程度で極端に衰えて、〝三帖なし〟の地名の説明に〝紙漉免租地跡地〟の説明があるほどである。

残ったのは杉原谷よりはかなり遠い三原谷（八千代町）で享保四年（一七四七）の村明細帳に上三原（十二軒）、中三原（七軒）にすぎない。『播磨鑑』にも三原紙がある。ここが遅くまで紙漉きを続けたのはかつての赤穂藩の領地で藩の指導があったことに原因があるのだろう。

二、佐用に海田の厚手紙

〝杉原紙〟の産地が北播磨の東端であるに対し、最西端の佐用郡で漉かれたのが『海田紙』である。発音が似ているところから『甲斐田紙』とも呼ばれた。地名の変更（宝永六年＝一七六四）が許されて〝皆田紙〟となったのだが、『維摩会講師方条々』の記年（大乗院寺社雑事記）、文明七年（一四七五）を先学たちには最古としている。その後、『蔭涼軒日録』が長享三年（一四八九）、延徳二年（一四九〇）、延徳三年に海田紙を語っている。例示すると、

（イ）長享三年三月三日。藤左より杉原三束、青苔二百把、埜里二菓（数十个）、百足、厚紙二束、内方より埜里一菓、五十疋、小倉小四郎方杉原三束。（註）この前年長享二年には長船勝光宗光が千草鉄を京都に運んでいる。

（ロ）延徳元年十二月十八日。赤松より贈る所、杉原十束、藤左より杉原三束、青苔三百把、野里三巣数十五、厚紙一束上る。（註）この頃は八月朔日と年末に紙の贈物が赤松氏より届くのが例であった。

（ハ）延徳元年十二月廿八日。（前略）紫藻五畳、青苔廿把、丹炭一荷、静香軒に贈られる。同野里二ヶ蔓月印に贈られる。

（ニ）延徳二年二月廿一日。杉原三束、雑紙二束、公之を恵む。播産也。

（ホ）延徳二年六月晦日。白帷一領、播の雑紙二束昌子をもって彦龍蔵主に贈る。

（ヘ）延徳三年六月廿五日。播州丹首座方より中間、又次郎夫丸一人、種々注文を調べこれを上る。…十二種運送す。同藤左方より狸皮一枚…中紙三束、雑紙五束を上る。

（ト）延徳三年九月十四日。甲斐田紙一帖藤左持来り之を恵む。二枚屏に用う可しと。

（チ）明応二年三月一日。藤左より海田厚紙一束之を恵まる。藤左之を持ち来る。龍安寺息女洞勝院、赤松公婚姻之義、今日相定る。先ず播州之行、有る可し。（筆者読み下し）

文明七年のものは強（こわ）杉原紙の代用に甲斐田紙を用いたので甲斐田紙が厚手紙であったことを語っており、長享三、延徳元の厚紙と同様で、延徳三の甲斐田紙、明応二の海田厚紙は両様の名称だが、同一のものであることがわかる。延徳元と明応二の項の赤松公婚姻云々を抽出したのは赤松政則と海田紙が無縁でないことを示した。

また、延徳元年に二度も野里の名があるのは、〝野里鍋〟が播州名産であったからで、また、延徳二、三年に播州産の雑紙の名があるのを『杉原紙』の著者藤田氏は生産地を疑問視されているが、つぎに挙げる資料がその疑問を解く端緒となるのではないか。

〝石作庄油事、寛正三上月代官〟（久我家文書）に

一、厚紙五束五帖（下略）一、雑紙壱束。

とあり。厚紙、雑紙は石作庄神谷（河谷）でも産出している。後考に期待したい。

海田紙は佐用郡の幕山川の上流、海田（宝永六年に皆田に変更）西本郷、蔵垣内、中山の村々が産地で『新撰紙譜』にも厚手紙と記されるが、近世では赤穂浅野藩（刃傷事件の）領で、経済政策に力を注いだ藩なので、皆田紙の生産も北播の三原谷と共に盛大で、のちのちにも続いた。また時代とともに紙漉き村も移り、西大畑（畠）西新宿へと変わり、文政八年には紙価の低落の是正を願い出たこともあった。昭和戦前まで伝統は保たれた。薄手の三折紙。障子紙を数十軒（大正末期）が漉いた。伝承では上郡町や龍野町でも販売した。このことを裏付ける資料がある。

『代呂物品付覚』（万延元年＝一八六〇年申五月）千本店種屋市兵衛によると かいた。皆田、大畑、五明、さくら、新宿

四寸物　五十枚一束目方三百匁位より六百目位也

四寸三分　寒ずきハよし　春出来ハあしく　きすきハかたく

五寸もの　殊ニがんぴ入ハ尚かたし　すきなおしハ　和也のり入りは色白く。

『播磨鑑』の記録より詳しい資料と思う。

三、都多紙屋のルーツを求めて

北播多可郡の和紙は『播磨紙』『杉原紙』として奈良時代に

ルーツを持つ。西の佐用郡の紙は厚手紙＝海田紙として著名であった。

さて、〃杉原紙〃と〃海田紙〃にはさまれた宍粟の紙は……。漉いていたけれど、さほど有名ではなかった。ところが調べれば、奥は深かった。

誰もがご存知の「生谷村」は紙すき村で四国からの職人も来ている（山崎町史）こと、山崎陣屋門は紙屋弥右衛門の寄進門であること、大抵はここで止まる。実は天保初年作の手習本の山崎往年、三方往来に伊沢杉原、うすき三方紙とある。また『播磨鑑』の杉原紙、皆田紙の項に並んで〃紙子紙〃として宍粟郡、佐用郡で漉き「姫路へ出シテ、モミ紙ニ仕ル也。是ヲ姫路紙ト云」と、この程度の説明である。郡内で唯一の地誌『宍粟郡誌』（宝永十二年＝一七〇八）でも、「都多の厚紙、牧谷の厚紙、皆田、伊沢杉原、御方の半紙をよしとす」と記している。

ここまで遡るとかなり明らかになる。幸いなことに新資料がある。それは慶安二年（一六四九）の第二次池田藩時代の郡内の『村々明細帳』である。千草谷と土間谷等を除いた村々の記録である。次にこれを中心にそのほかの資料を入れて紙漉きの状況を表示する。

— 表産生産和紙生産による宍粟の村々明細帳 —

山崎藩領村々明細帳（寛文年間一六六一～）						郡主帳（元禄六年）	郷中古事録 十八世紀中頃	山崎町史掲載（六九六頁表岸田村野々上村安志町は削除）	
地域	村名	紙舟役銀	新舟役銀	推定船数	備考	紙舟役銀		訂正	註 支配領主の違いから資料なしもあり
伊沢谷	上町村	五六匁		一六	紙舟数は一艘3.5匁の役銀から推計	五二・五		公文村	七・二
	中町村	一七・八分	三・五匁	六		一四		三方町村	七・五
	上牧谷村	一四・三分		四				福地村	三〇目
	下牧谷村	二九・三分		八			二九匁三	落山村	四・五匁
	片山村	一六・六		四～五			一六・六	上小野村	
都多谷	上ノ村	三		一		三		東安積村	二・〇
	中ノ村	一一		三		一一		野田村	
菅野谷	青木村	三四	三・五	一二	役銀一艘3匁から			伊和村	四・〇
	高下村	一〇・五		五			一〇・五	神谷村	
	奥小屋村	三・五		一				五十波村	
揖保川筋	与位村	一〇・五		三～四	役銀一艘3匁			神戸谷	二・〇
	五十波村	三・五		一				西谷	
	神谷村	三・七		一				三方谷	四・五匁
神戸谷	伊和村	二・〇	四・〇	三	役銀一艘2匁	四・〇		落山村	三〇目
	野田村	五・〇		三				福地村	七・五
	東安積村		二・〇	一		二・〇		三方町村	七・二
西谷	上小野村		二・〇	一				公文村	
三方谷	落山村	四五・〇		一八	役銀一艘2.5匁				
	福地村	一七・五		七					
	三方町村	一〇・〇		四					
	公文村	一〇・〇		四					

寛文年間の第二次池田藩の明細帳は千草谷などを欠くのは前述の通り領地外で、『郡玉帳』は天領が中心、『郷中古事録』は本多藩中心で、資料に一貫性がないのは惜しまれる。

原料の楮は郡内各村々が栽培していて、山畑を所有しない城下盆地（中井・鶴木・下広瀬）。城下町（山田を含む）。神戸地域の「構」村。山深い（戸倉・曳原・鹿伏）などを除く村は額の多少はあっても栽培し、楮一株（良し悪しあり）いくらの税を納めていた。

実際に紙漉きに従事したのは、伊沢、都多谷。菅野谷。揖保川筋神戸・染河内谷。西谷。三方谷であった。盛大であったのは、落山（百千家満）、福地(知)上町村の数カ所と思える。

江戸時代初期までは資料を頼りに遡及したが、ここで問題は紙漉きの痕跡を示す『都多中ノ村』の隣保名《紙屋》で、この時に初めて紙屋が成立したのか、もっと以前からの地名なのかが疑問として残る。小字名「宿（しゅく）」が当地内にあり、の一区画でもあり、かなり古いとされる。

①まず考えられることは、池田藩の明細帳が楮の株数を数えて課税するのは、かなり古くから栽培があってのことであろう。苗木栽培・植え込みは、短年月では育成しない。字名は現今の市町村合併で行政上村名を決定するほど、人為的ではない。長い期間を経て生まれるものである。自然発生的な村名は、その時期をどこまで上ることが可能か。『播磨国風土記』の時代まで遡及するものもあるが、結論はつかない。

②試論で始めよう。紙屋地名のルーツを尋ねてみる。『久我家文書』の「ハリマノ国石造庄勘定状事（永禄頃カ一五六〇頃）」に現在使用中の村名と寸分違わない村名が登場している。須賀・高所・三谷・中・神谷（河谷）・矢原である。また現在は小字であるが、その名称を指摘可能な地名がある。例えば、

（イ）カチカサハ＝蟹ヶ沢ではないか。須賀沢村が両方の合体名なのは周知の事。

（ロ）桜木。須賀の内で中国道と（田井・中広瀬線）の交叉する付近。字限図に出る。

（ハ）タラハラ＝今はタジワラと呼ぶ。中と神谷との中間点。中山の西側の山麓に人家数戸あり。（新住宅は別）

（ニ）ミトヲリ＝前述のタラハラ（足原が原型か）の山麓に沿う低湿地。字限図の〃水通り〃の原名か。面積は、世代（シロ）三谷次郎兵衛の耕作地になっている。

（ホ）橘村（たち花）＝今は立花所（タチバナジョ）として神

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS
本　　店　TEL(0790)62-0700
さつき通り　FAX(0790)62-2117
ブックランド店　TEL(0790)64-2051
山崎町中井　FAX(0790)64-2052

谷村の一区で「立花」姓の数戸がある。在家（ザイケ）の別名もある。

（ヘ）カイゲンギョウ＝神谷の平坦部。河東小学校の南方に続く。字限図に『戒現行』の地名がある。意味は要研究。

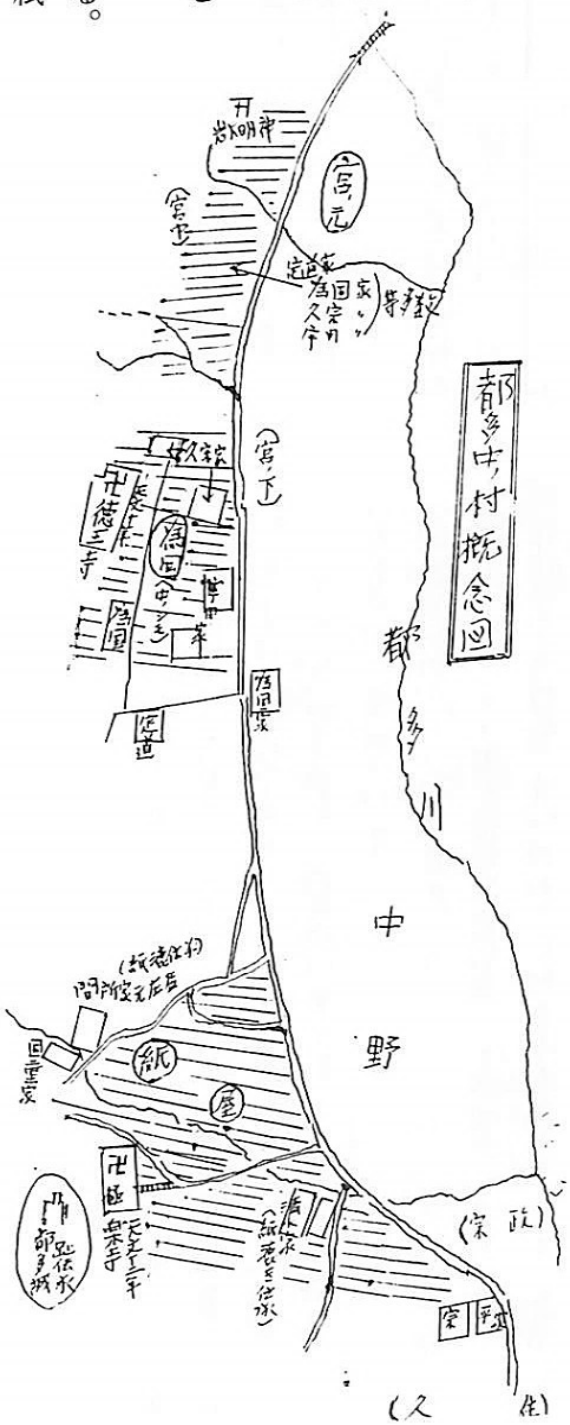
（ト）月ノ本＝矢原の内で神谷に接する土地。字限図では〝月ノ元〟となる。

以上のように、現行の地名と違わない地名が十六世紀中頃、今から四百五十年前頃には使用中であったこと。これは都多村、中ノ村まで適用可能であろう。紙屋地名はまずここまで遡及可能。

③石造庄神谷に『紙屋左衛門』という人物が居住していたこと。一方の都多中ノは〝紙屋〟という村で、他方は〝紙屋〟を姓（職業）とする人物が住んでいた。

丁度そのころ、都多中ノ村の一区画に、紙漉きをする人々が多かったので、その区画を示す地名とし〝紙屋〟の名称が自然発生的に生まれたのではないか。

④都多中ノ村には、寛文年間（十七世紀中頃）に六十九軒（四〇七人男二一七人　女一九〇人）がある。六十九軒が宮ノ元・宮中・宮下・紙屋・宗政・久住の地区に分かれていて、宮ノ元は岩大明（桓武の名はない）、宮ノ下（為国）には真言宗徳王寺。紙屋には浄土宗極楽寺があって、徳王寺が天文十年、極楽寺は天文十二年の創建と『郡玉帳』（元禄六年）が記している。また伝承では久住に光明庵があったという。徳王・極楽の両寺があまり大きくもない隣り合う集落に時期を同じく建てられたことは創建（そんなに大きくない寺）にまつわる種々な経緯があったのではないか。教義上・行政的・経済的な事情があったのではないか。想像的な理由だが、紙漉き業が発展し、〝紙屋〟集落の生活状態の向上が、久宗宮下集落に競っての建立ではないか。



⑤紙屋集落には、古く庄屋を努めた家があり、明治三十年代生まれの老人は紙漉き仕事を子供たちに口伝えに教えていて、生谷村の紙漉業者、紙屋氏にミツマタ（紙漉原料）を送っていたという。それは自宅の裏の畑でミツマタを栽培していたからである。

話しが飛びすぎたが、庄屋は地方の信望と経済力のある家が継承するのが例であるから、この〝間所〟家は地区の有力者であり、極楽寺創建当時から地元として関係をもっていたようだ。

〝間所〟は政所（マンドコロ）の変化した語である。他にも紙漉業の伝承のある家がある。寛文年間の村明細帳では三軒位あったと推定出来るから、忘れられたもう一軒があるのではないか。

⑥都多村の和紙にもう一つの資料がある。都多村は山科家領であったことは前にも述べたが、山科家領の都多村は高家庄の内ではあるが行政上は別扱いで、この村は山科家領であり、独自の資料（山科家礼記・言国郷記・言継郷記）が残っている。また、便宜他の資料も引用する。

都多村については正長二（一四二八）年から史料に見られて応仁年間（一四六七～）から度数も増す。その中で主として問題の都多村の和紙に限って取り上げる。

（1）文明二（一四七〇）年九月十四日。
宇野越前守、折紙代百疋。

（2）延徳四（一四九二）年六月。
宇野越前ヨキ杉原紙十帖。

（3）文亀元（一五〇一）年三月。
ラウソク二十丁（土産也）

（4）天文元（一五三二）年三月。
都多村よりわた一把・漆二合・中折一束上了

（5）天文十三（一五四四）年十二月八日。
宇野上野介鹿皮二枚。

（6）天文十五（一五四六）年正月十三日。
宇野上野守より杉原一出之。

（7）天文十七（一五四八）年。
杉原一束

（8）天文二十二（一五五三）年五月。
杉原一束出之。

（9）天文二十三（一五五四）年二月廿一日。
杉原一束到来。

（10）天文二十三（一五五四）年二月廿一日。
杉原一束到　播州都多村よりの土産也。

（11）弘治二（一五五五）年正月九日。

きれいなカラープリントの店

Specialty Camera Shop
コーエーカメラ
本店　宍粟郡山崎町東鹿沢 26-3　☎62－2089
フリーダイヤル　☎0120－440－990
ＦＡＸ 0790－62－7429
咲ランド店　ＴＥＬ 0790－63－0533

都多ノ宇野右京亮方より杉原一束計到。

以上十一点が挙げられる。その中、数点はラウソク、狸皮で別途に考察する。

領主から代官に対して貢物を要求するものは、それに代る銭貨が中心で、外に付加税に類したその土地の特産物が指定される。

揖保川下流の下揖保地区には、鮎鮨十桶、鮎のウルカ十桶、青苔百把が課せられている。都多村の場合では文亀元、天文十三の

ロウソク。鹿皮、漆は明らかに付加されたもので、文亀元年は応仁二年の誤り、天文十五、十七、二十二、二十三（二回）弘治二の六回は納めることが可能に、すなわち杉原紙と称しうる品物がかなり多量の生産が進行していることを示したと言える。他に明らかにしておくことは、前記の杉原紙（都多杉原）が間違いなく都多産と決める証左はどこにあるかと言うと、（10）に挙げた播州都多村よりの土産也（筆者太字）の一文で（3）でロウソク（4）（5）の漆、鹿皮が土産也と言うのと同じく杉原紙も土産で他地方の産物を入手して領主側の要求に応えたのではないことが明白である。

『紙屋』集落は徳王寺・極楽寺が創建された天文十…二十年代から次第に紙漉き業が定着してきた。それが継続して、寛文期の村々明細帳に残り、江戸期に至っていると考えられる。

今のところ文明二（一四七〇）の資料が最古であるが、石造庄（寛正二年＝一四六一）の約十年古い資料を都多村にも援用するとして、紙漉き業は非常に古い事業歴から成立した産業と考えると、起源はまだまだ遡及可能である。

四、和紙を漉く過程とそのひとたち

古代から中世、近世に渡って、続けられてきた和紙について、名称と用途、その来歴などに触れたが、製作の過程と作業を回顧してみる。まず原料は楮中心で穀類の栽培に不向きな山畠が中心で宍粟郡の場合は各村に栽培が命じられて多可郡も佐用郡でも資料は乏しいが同様で、佐用郡では美作方面から不足を補い、多可郡でも山越えに神崎郡越智谷から受け入れていた。（越智谷はもと多可郡域という）「ふるさと上月」の解説によると、

楮（別名カゴ）は冬期に株元から刈る。（一株から五本、十本と二、三メートルに伸びている。宍粟では一株いくらの税がか

かった。）切り揃えた楮をゴスンという大釜に入れ、一、四メートル、直径一メートル位の木製の桶・コシキを冠せて蒸す。（楮蒸し）楮の木の根本から皮をむき、束に結び、天日に干す（黒皮）。黒皮を流水に浸し、数時間後に川の中で踏んで黒い皮をとる。残った分は包丁で削る。川水で洗い天日乾燥（皮しじり）、製品は〝白皮〟。白皮を一晩水浸して木炭の汁で煮る（桶をかむせ）こと約五時間（煮沸・皮たたき）。煮た白皮は流水中で約一週間（さらし）。白皮に付着したまざりもの（チリ）を除く（チリより）。出来た材料を叩き台にのせて叩く。量により三十分間以上（紙タタキ・草打ち）。

ここで材料が出来上がるが、火を燃やすこともあるが、寒の最中に冷たい流水の中で踏んだり、流水に打ちつける数時間の作業は辛い仕事で我慢の限度を越えた辛抱しなければならぬ地獄での仕事であった。

いよいよ紙漉きとなる。漉き船（フネ）に材料とトロロ粘液を混合するが、調合加減は熟練がいる。マンブリで根気よく混ぜる。カセ（枠）にス（簀）をはさんで船（フネ）の液をすく（掬い上げる。掬うと一口にいうけれど、これがまたむずかしい。薄手紙を同じ厚さにすることはどれだけ熟練を要するか、考えもみよう。

このように寒風に雪の舞う寒中の流水に身足を浸す長時間の作業。それが済めば、トロロと楮の液との調合を覚え、枠にすくい上げ粘液の量は科学性と微密性とが要求される仕事である。出来上がった和紙は役人共に一言の礼もなく当然のように取り上げられる。

過酷な労働と神経を磨り減らす仕事、すばらしい仕事をだれが文化を支える基盤作業と称讃しただろうか。

和紙を使った文学、絵画、工芸品や、文芸作品は惜しみない栄誉を受けた。しかし、前に述べた文化を最低の立場で支えた人こそ、惜しみない絶賛の詞を受けるべきであろう。

彼らの仕事が忘れられようとするとき、加美町では『杉原紙研究所』を設け、上月町では「ふるさと上月」と、紙漉きの実演を毎年行っており、一宮町では「ふるさと福知」を刊行して下積みの仕事人に手向けている。これは現代人の感謝の塔である（大谷司郎氏に教示を受けた。感謝する）

贈答品・記念品・名入タオル・ギフト全般
ギフトショップ
まどか
Personal Gift LOIRE
ロワール円
宍粟郡山崎町中井１０５－１（ジャスコ南）
ＴＥＬ0790(62)8726
ＦＡＸ0790(62)9681
ご用命は通話無料のフリーダイヤルでどうぞ
0120 0120－338726

川東古道

下村哲三

現在は何処へ行くにも自家用車、タクシー、バス、レンタカーなどを利用して歩行者がほとんどなくなった。昔は土地を離れるといえば歩くより方法はなかった。足の弱い者、病弱な者は、馬や駕籠によって遠方へ行ったらしいが、、経済の関係から大部分の者は草鞋ばきで歩いたもので、それより更に古い人間は素足で歩いたらしい。しかし、宍粟郡に残る伝承や古文書では知る由もない。山崎から奥筋への道は、従来清水口を東へ出て、中広瀬で揖保川（出石川）を渡し船（現在の宍粟橋の位置）で川東に渡り、東出石から出発して高所～中～三谷～神谷～矢原～岸田～野々上から釜ケ岨の難所を経て、杉ヶ瀬に通ずる川東往還があった。

寛永八年（一六三一）に当時、富士野銀山が繁栄して荷物の運搬が盛んになったので庄能～三津～五十波～田井までの山麓を通る川西道に改められ、新しく田井、杉ヶ瀬間に渡し船が作られた。それ以来、川西道が本通りとなって三方谷、西谷、染河内谷、から薪、炭、板、材木、鉄などの輸送路として利用された。

しかしながら奥筋から東出石の高瀬船の発着場までの距離は、従来の川東の方が近く牛馬稼ぎの人達も杉ヶ瀬から釜ケ岨を通って野々上に出る道を利用した。だが川東古道の難所は釜ケ岨で、延長八百米で崖と川にはさまれて道幅が狭く、岸壁面に二、八米～三米の幅で河床より、玉石と岩石を使用して、三米の高さに石を積み上げた狭い道で、洪水時には山から土砂と落石で、石積が崩れ交通不能になることがしばしばあった。地元、野々上としては寛政十一年（一七九九）に大坂御番所へ新たな普請を差留めるよう願上げた事を末尾に記載している。この記録は野々上の元総代藤田浅夫氏より頂いたものです。

以上が第一の難所の所以である。釜ケ岨以南の古道は別紙図面に記載していますから参考に願います。河東地区の古道が通っている地形の概略を説明すると、古より野々上、上矢原、神谷、中山台、中、以上の五地区は山麓の高台にあり、下矢原、さつき台、高所、出石の四地区は山麓にあり、特に岸田地区は耕地が広大なため平坦治に三区域に別れる状態である。釜ケ岨の終点にお大師様と観音様が祀ってあります。天明七年（一七八七）この道を通りかかった深正坊と言う老僧が大変な難所のある道だと、通行人の安全を祈願して、身代わり行者尊を自ら彫り上げて、祀られたと言う伝説あり。そのお大師堂を過ぎ山麓を進み大谷川を渡り、野々上の八幡神社前で道が多く別れているが、秦繁司氏の前を経由して柳田進氏の西まで、正しく集落の中央を日常の生活道として古道を改良し、活用している。この点かは家と家との間を抜け通り、その上傾斜の地形を利用して旧県道まで下る。第二の難所へは、やや緩やかな勾配で山麓を南下して一部岸田内では、

ほ場整備に編入してあるが、それ以外は古道の改良で矢原の山越まで続く。

矢原越の区間は岸本彰夫氏宅の前より東に直角に折れ、延長一二五米の登りで、比高は五米、背負いの人、ざる駕籠で登る人、ざる棒で担ぐ人、牛馬の背中にうけて運ぶ人、しかも雨降り、雪降りには滑る具合で、一寸過酷な仕事であったろう。登り切った所に宝篋印塔があって、頂上で一休みして後方を眺めれば岸田平野が一望に見え、かつてその昔、鎌倉末期の元弘の戦で軍功をたてた釜内小次郎範春が、赤松円心入道より、岸田村五百石を賜っている。一休みした処からは緩やかな下りで、延長九十米あり、この第二の難所は昔ながらの道で、幅一米二十糎米で山肌を切り込んだままで、頂上の一部分は古道そのものが残っている。（清水貫治氏宅の東）矢原の難所を過ぎると、用水路沿いに古道があったのであろうが、今では県道に編入されている。矢原と神谷の境界からは山麓沿いに古道が残っている。

神谷の春名貞一氏宅から旧神谷公民館までは改良古道であるが、旧公民館から中山台、さつき台、中の大蔵字までの状況は平坦であるが、依然として道幅は一米十糎から一米六十糎で片面もしくは両面には用水路と排水路があるため、道高は一米五十糎から二米で崩れやすく、通行人は度々転げ落ちることも多くあったであろう。しかし、この区間は、さつき団地内で一部分、町道に編入されているが、これ以外の道は昔のままの形態で残っている。川東古道での超一球品に値する。

第三の難所は中と高所の高台越しで、三谷川を渡り、お池までは平坦であるが、池を過ぎると急な登り坂で、延長百九十米で、比高は九、〇米しかも頂上近くは、ほ場整備で完全に古道は無い状態である。高所側の下りは、延長二百五十米で、県道近くの（小林豊氏宅）の東より古道が南下している所までは、休耕田がジャングル化して通行は無理で、残りの道は昔の田圃道のまま残っている。高所地内は集落の中央を南へ下り、古道が多く残っている。中央くらいに大師堂と、向かいに面して五輪塔（長水城の戦いの勇士の供養塔）であろう、その処からは大部分は古道が残っているが、一部分畑の畦道と化している。

春日谷を渡れば往時の元和二年（一六一六）より大正末期（一九二五）の間、三百年間続いた出石浜で、高瀬船の繁栄も今日では、栄枯盛衰夢の跡で、人影もなく、草木も深く鬱蒼としている。ここが川東古道の終点である。

播磨鑑では一宮までの間には二ヶ所（釜ケ岨と高岨）に川と弾劾にはさまれ、洪水の被害を受けやすい難所があるので『ひち築の宮』が遥拝所であったという伝承は首肯できる。

古代の大和政権へ伊和族（伊和神社創建者）が優れた、千草鋼を貢献したのも、川東古道を南下して飾磨経由で大和に送ったのであろう。又元弘の戦いの折り播磨の御家人で、宍粟の奥から安積守氏、一の宮坊中の室谷大宮刺吏の一族等は、川東古道を通り出陣したであろう。

就中高瀬船で宍粟郡の物資を、網干まで輸送していた頃は、川

東古道の多くあった難所を越え、御用米、鉄、炭、板などを牛馬の背につけ東出石にあった天領代官所（山方所）と船問屋の本鳩屋、播磨屋、浜の屋、本但馬屋、新但馬屋ありて六軒の船問屋と代官所のどちらかに荷物を降ろして賃金を受け取って、又、来た古道を帰る者、一泊する者、船に乗って網干に下る者、山崎へ行く者、須賀の長井船問屋に荷物を持って行く者、この長井船問屋は山方所へ勤める役人の給与支払い所であり、安志藩の御用達商人であったため、人夫の出入りが頻繁であり、その上須賀の渡しを利用する人が多く、北へ行く人のため屋敷の隣りに、道標（右出石、一の宮）が設置されたのも納得出来る。又東出石から山廻りで須賀経由にて安志、姫路方面に行く者あって、東出石が終点であり、又出発点でもあって宍粟郡全体から言うと扇の要であって、重要な位置にあった。

だが、この裏では沿道に住む者は古道の補修、除雪人夫、御代官様や、それ以上偉い方が来られたら、箒、鍬持参で道の掃除を行ったようである。それが往古の跡である。

※現在古道として昔の形を残している場所は

①野々上釜ケ岨八百米

②矢原の山越え七十米

③神谷旧公民館より中の字蔵の元八百米

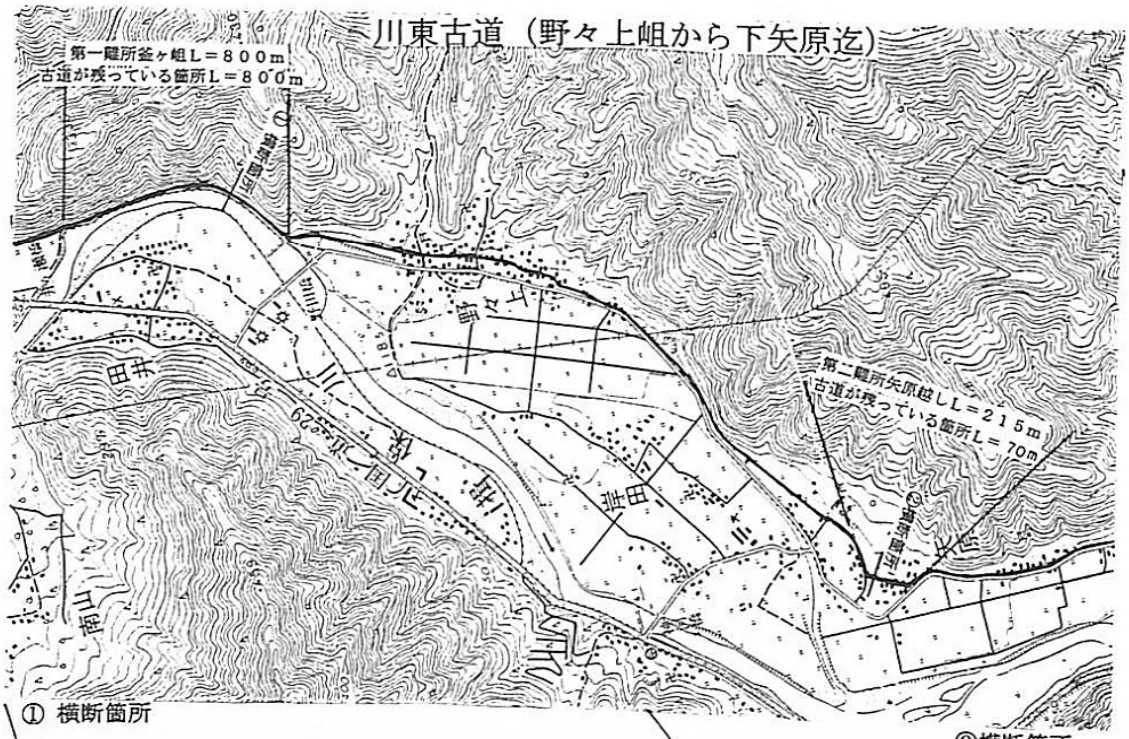
④高所小林豊氏の裏道から大師堂まで三百十米　以上

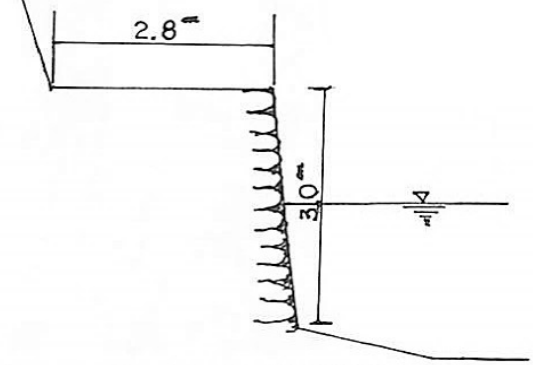
道論和談

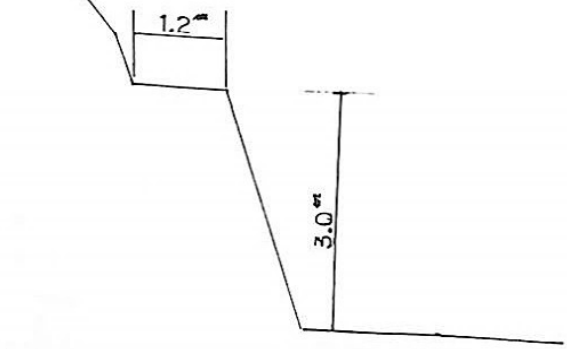
宍粟郡揖保川筋の杉ヶ瀬村より野々上村との間、釜ケ岨の道修繕新たに岩を切り落とし普請について、岸田、矢原、神谷、中、高所の五ケ村と山崎の今宿、中広瀬河岸問屋より杉ヶ瀬、野々上両村を相手に寛政十一年大坂御番所へ新たな普請を差留めるよう願い上げた。調査の上絵図を仰付けられ道幅間数等記し、その絵図を提出した。この度、関係藩役人立会の上（四人）和談成立。釜ケ岨道新たな普請はしない。もし、破損の時は応急修繕をし岩切取は勿論新たな改修はしないこと。野々上は牛馬通行は自由であること。外の村の牛馬通行は前の通り、杉ヶ瀬村舟渡しをこえ田井、五十波、三津、庄能へ往来すること。

山崎出石への売荷物の牛馬往来は一切してはならない。石の通りおのおの立会一同了解の上連印する。

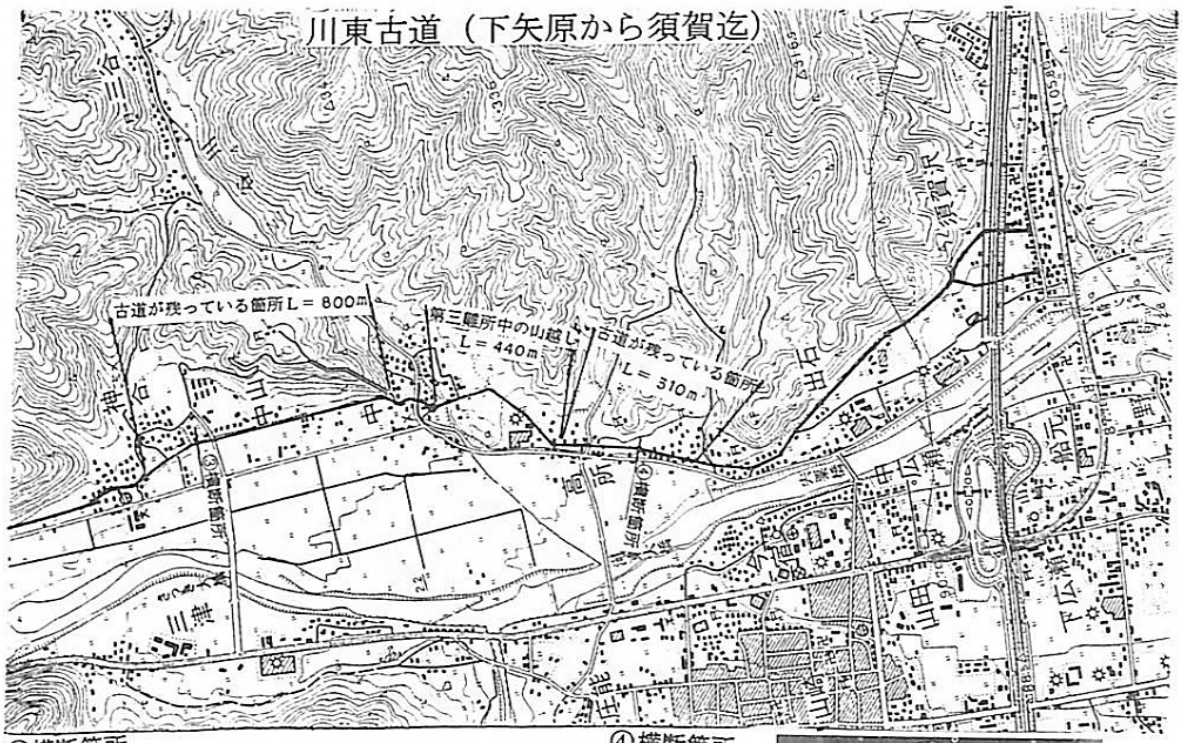
川東古道（野々上岨から下矢原迄）



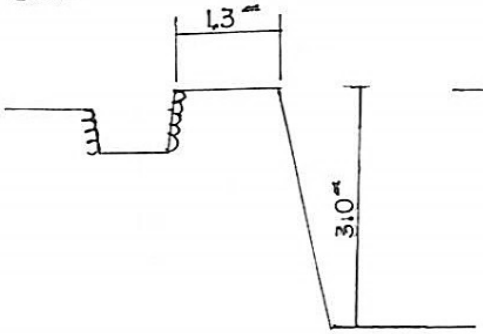




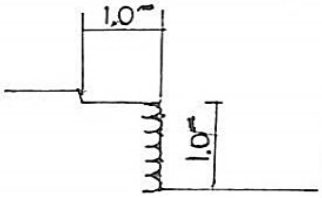
川東古道（下矢原から須賀迄）



③横断箇所



④横断箇所



道標　長井船問屋の冒ろ

兵庫県宍粟郡山崎町野字塚之元の経塚から出土した「上方作」獣帯鏡（東京国立博物館所蔵）について

片山昭悟

一、はじめに

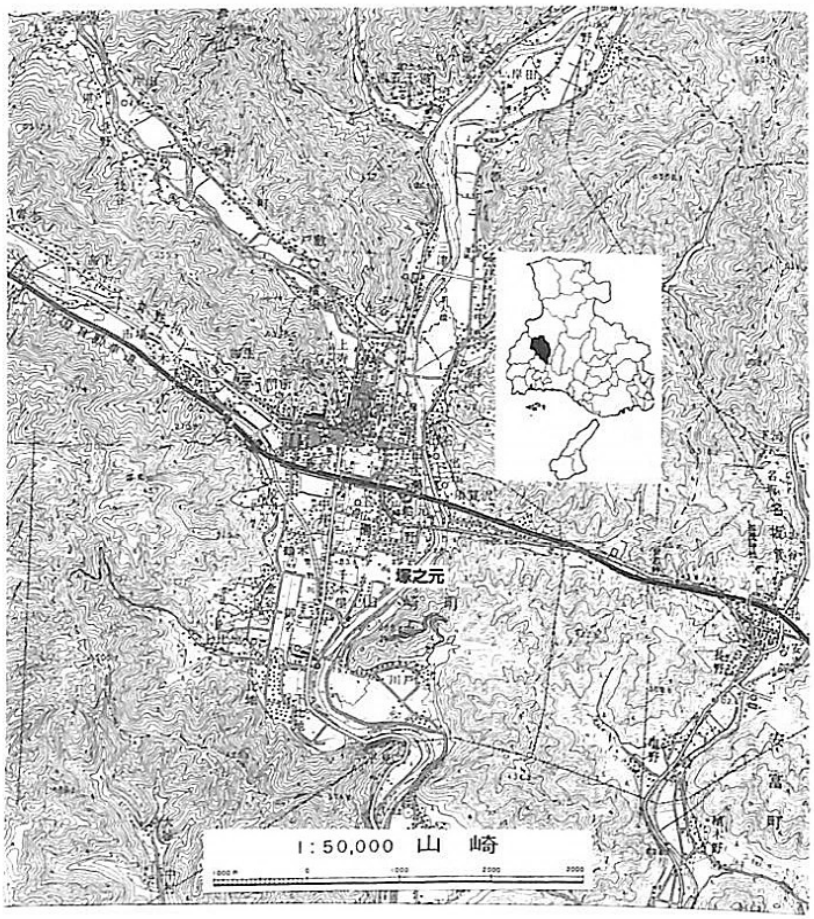
兵庫県宍粟郡山崎町野字塚之元の経塚から中国の後漢時代の獣帯鏡が今から八十七年前の大正時代に出土している。現在、東京国立博物館に所蔵されている。

「上方作」という銘文がある獣帯鏡で、邪馬台国の卑弥呼の時代と極めて関係する時期の鏡であり、製作年代が二世紀後半のものではないかと推定される。三角縁神獣鏡直前の時期で卑弥呼の時代を考える上で重要な銅鏡である。それが山崎町で今でいうタイムカプセルのような経塚から出土している。経塚は一石経というもので、五十六億七千万年後に釈迦の代わりに弥勒如来となってあらわれる。そのためにお経を埋納するという末法思想である。

銅鏡については、東京国立博物館に所蔵されていることから後藤守一「東京帝室博物館の新収品」『考古学雑誌』第十巻第四号はじめ後藤守一『漢式鏡』や大手前大学教授の櫃本誠一先生が兵庫県立歴史博物館館長補佐当時『歴博ニュースNO六四』に「誌上博物館五八銅鏡の変転―山崎町塚の本経塚出土の四獣鏡」を紹介されている。

私は金谷出土の奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡が東京国立博物館所蔵であり、同じ城下地区で大正時代の出土であり、約十五年前より出土地について調査をしていた。銅鏡について出土が古墳からか経塚か明らかでなかった資料であり、古墳ではなく経塚からの出土であることや出土状況、周辺の地理的環境や歴史的な環境をふまえて一石経塚についても考察する。

なお、東京国立博物館に所蔵されていることから先学の先生が紹介されている。



二、「山崎新聞」の記事より

「山崎新聞」第五十六号　大正六年（一九一七）三月一日付によると、経塚の出土状況や獣帯鏡の出土状況がわかる貴重な資料である。ここに紹介する。

「○経塚を発掘す

□城下村の内野字塚の本の田二反二畝二十七歩は此の程来耕地整理のため開墾中去る十一日のこと地下約二尺余の処にて鍬の先にカチリと当たりし物あり

□発掘したるに古鏡一面が三枚に割れその下には口の直径九寸の古き壺一個ありて石の蓋を施しあり中には多数の白き美しき小石一杯詰め込みありて蓋石の裏には南無阿弥陀佛と書き

□猶「衆生済度のため三部経五萬六千余文字を一字一石に浮写す」云々と記しありしかばその儘埋没したりとの事を山崎署にて探知し直ちに一応取り調べをなしてその旨本縣保安課に報告したり

□同地方は天正八年五月羽柴秀吉が長水城主宇野下総守政頼と戦いし古戦場にてその際多数の戦死者を出したるより同地方に合葬したりと言い伝えある外該塚に就きては何の考証もなく発掘品は不日保安課に送達さるべしと」

塚之元　経塚銅鏡出土地点（片山撮影）

大正六年（一九一七）二月十一日に地下二尺（約六十センチ）の位置から古鏡一面が三枚に割れ、その下から直径九寸（約二十七センチ）位の壺があって石で蓋をしたものである。中には多数の白い美しい小石が一杯詰め込んであり、蓋石の裏には南無阿弥陀佛と書かれていた。直径九寸位（約二十七センチ）の壺であり、壺の直径から中世の須恵器ではないかと推定される。

山崎新聞
大正六年三月一日

三、塚之元出土の獣帯鏡についての研究

経塚の発見と獣帯鏡の資料である。ここに紹介する。

①後藤守一「東京帝室博物館の新収品」『考古学雑誌』第十巻第四号によると、「播磨國宍粟郡城下村野村字塚ノ元　稍〃小高い盛土とあるのみで墳形は不明、埴輪も葺石も有無は判然としない。石槨も同様。報告書によれば、地下約二尺の位置から鏡及び直径八九寸位の丸石を以て蓋を為した小壺一個を発見した。壺の中から数多の小石に六字の名號等を記してあったと。然からば経塚の簡単なものらしいが、鏡は所謂漢鏡である。径四寸、反り

一分、本誌六ノ十二、高橋先生の銅鉾銅剣名第二十六図に似た五獣鏡で「上方作竟眞大好……宜孫子」と銘があり、作も優秀、漢式に属する支那（中国）輸入鏡と思う。恐らく忘れられた古墳の上に設けられた経塚であらふ」とのべられている。

②後藤守一『漢式鏡』「第一篇解説第八　本邦内地發掘漢式鏡各説（播磨國）」によると「同郡城下村大字野村字塚元から発見された獣帯鏡（第四百九十二図）（四獣鏡）は、半分を欠失しているが、黒漆の色美しく文様も鮮明を失わない。支那（中国）製の四獣であらう。銘文も「上方作竟眞大……宜孫子」と訓み得られる。」

第二編解説第七本邦内地に於ける漢式鏡發掘地々表（播磨・美作・備前國）

発見地名		発見年月	伴出遺物	鏡の種類	鏡番号	鏡面経
同郡城下村大字野村字塚元		大正六年二月	陶製壺	獣形鏡	六七〇	一〇・九
挿絵番号	所蔵者	備考				
492	東博（八八〇八）	拙稿「東京帝室博物館の新収品」（考古学雑誌一〇ノ四）				

第四百九十二図
獣形鏡
（播磨國宍粟郡城下村大字野村）

（約三分一大）
（東京帝室博物館蔵）

後藤守一『漢式鏡』1926

「上方作」系半肉彫獣帯鏡
（米子市石州府29号墓）

岡村秀典「卑弥呼の鏡」
『邪馬台国の時代』1990より

③岡村秀典「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』によると、

「三角縁神獣鏡以前（漢鏡七期の鏡）

三角縁神獣以外の神獣鏡及び獣帯鏡など、漢鏡七期というのは弥生時代というよりむしろ古墳時代に入るのではないかというような考えもできます。

邪馬台国の卑弥呼の時代と非常に関係する時期の鏡、製作年代が二世紀後半を中心に三世紀に入る時期と推定されている。三角縁神鏡直前の時期で、卑弥呼の時代を考える上で、三角縁神獣鏡に匹敵するだけの意義がある」と述べられている。

第Ⅰのグループ「上方作」という銘文がある半肉彫り獣帯鏡が中心で飛禽鏡、画像鏡なども含めます。獣帯鏡は中心の紐の回りを浮彫りふうに表された動物が四～六体めぐるもので乳と呼ぶ突起で動物を区画している。この外側に銘文、さらに鋸歯文がめぐり、周縁は斜めに傾斜、断面が三角形のようになったものが多くみられる。

九州から近畿に比較的均等に分散し関東まで及んでいる。

④櫃本誠一「誌上博物館五八　銅鏡の変転　―山崎町塚ノ本経塚出土の四獣鏡―」

播磨地域における弥生から古墳時代の銅鏡は、七十六基の古墳と八ヶ所の集落遺跡から一四八面の出土が知られている。東京国立博物館には二十八面が所蔵され、「宍粟郡城下村大字野村字塚ノ元出土」とする四獣鏡（獣帯鏡とも分類）が含まれる。

「上方作竟」銘獣帯鏡は、各地の古墳に分散した状況で約十八面

が知られるとされる。

四獣鏡は、徳島県節句山古墳、佐賀県熊本山古墳、長野県弘法山古墳、六獣鏡は、広島県中小田第一号墳、愛知県笹ヶ根第一号墳、長野県中山第六号墳から出土とされる。

櫃本誠一先生は、「二世紀後半の製作時代から約百年後の古墳時代、さらに経塚への再利用まで一三〇〇年の間に二度の変転が想定できる。古墳副葬品の再利用なのか、その後の移入なのかは不明。また、踏み返し鏡の可能性もある。」とされる。

鏡を所蔵されていた保井安治郎氏が東京国立博物館に寄贈されている。

保井安治郎氏は、当時町会議員で、現在の山崎町西鹿沢の公立宍粟総合病院東の横井時成氏宅におられたとのことである。

⑤櫃本誠一『兵庫県出土の古鏡』によると、塚の本古墳墳丘上の経塚出土鏡である、とされる。「上方作竟眞大　功長保二親宜孫子」とされる。同式鏡には平安南道大同郡大同江面のいわゆる「楽浪もの」に類例があり、『朝鮮古文化綜鑑第三巻』の上方作六獣鏡などにその一端が窺えると述べられている。

四、塚之元の経塚を考える上で重要であることから周辺の歴史的環境、地理的環境について考察する。

1、塚之元周辺の歴史的環境について

①白鳳時代から奈良時代の古代寺院千本屋廃寺が千本屋宮ノ段にある

②平安時代の『延喜式神名帳』に記載されている雨祈鎮座する。現在は貴船神社で、雨乞い、まむし除けのお宮として知られる。

神社が

③地元の氏神である稲垣神社がある。神木からみて創建時期は古いように思われる。

④奈良時代の『播磨国風土記』宍禾郡比治里である。

⑤奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡が金谷から出土している。

⑥戦国時代の長水城や篠の丸城が見える。

羽柴（豊臣）秀吉が天正八年五月に攻めたとされる。

2、地理的環境について

塚之元の現地から周辺をみると、（平成十六年二月二十五日に現地調査する）

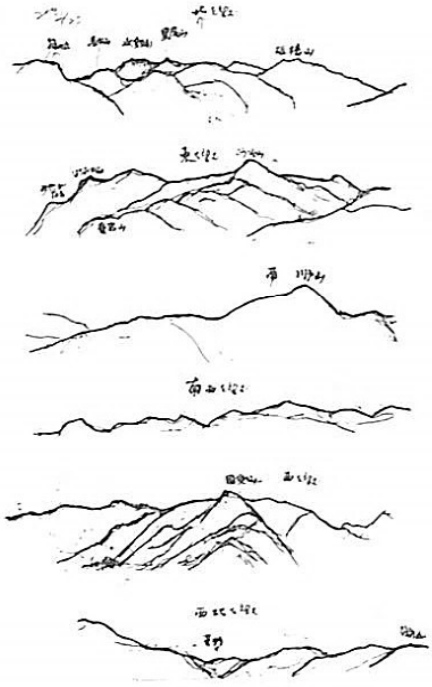
①周囲は四方が山々に囲まれている。

西には国見山がそびえる。一つ山で、神の宿る山のようであがめられていたように見える。経塚を考える上で重要な背景のようである。東は須賀沢から神谷にかけて山並みが見える。「こうぞやま」とよばれる。この山も国見山と同じようである。愛宕山に続く山並みや「八岡」から「みやこがなる」が見える。北は五十波にある雄棲山も見え神の宿るとされる。長水山の山並み、篠の丸、水剣山、遠くに黒尾山も見える。南は須賀沢から川戸にかけては、川戸山から続く山並みも経塚を考える上で重要な背景である。

②四方を見渡すと東西南北の谷間に続く交通の要衝のようで

ある。東へは安富町、飾磨郡夢前町に続く。西は菅野、佐用郡南光町、千種町に続く。南は川戸から揖保郡新宮町に、北は神野、一宮町、波賀町に続く。

③揖保川の西岸に位置する沖積地で微高地である。近くには将棋岩が見える。真淵という深い淵がある。その近くに山崎断層帯の活断層ではないかとされる箇所がある。



塚之元の現地からみた周辺の概念図

五、獣帯鏡について

①古墳からの出土でなく、また、古墳の上に経塚が造られたのでなく小さい石が積まれていたものであり、一石経の経塚であるとされる。地下約六十センチ下で獣帯鏡一面が三枚に割れ、石の蓋がされていたようで陶製壺に小石は入れられていてその上からの出土とされる。

②鏡は二世紀後半のものである。

邪馬台国の卑弥呼の時代（三角縁神獣鏡）以前の鏡で卑弥呼の時代を考える上で重要な資料である。

③四獣がめぐる鏡で三獣ある。半肉彫りの獣帯鏡。一つは朱雀と呼ばれる。羽根を広げている鳳凰のようである。二つは、白虎とよばれる虎のようである。もう一つは角が二つに出た鹿のような想像上の動物ではないかと推定される。

④銘文がある。

銘文は「上方作竟眞大　功長保二親　宜孫子」とされ「上方作」である。外区は外向きに櫛歯紋、鋸歯紋、鋸歯紋で断面は三角形である。

⑤一〇・九センチの小型鏡で1／2の破片である。

⑥黒漆色の質の良い舶載鏡とされるものである。

⑦大正時代の大正六年二月十一日に出土している。

⑧東京国立博物館所蔵鏡である。

⑨中国で「上方作」銘の鏡が出土している。

『巌窟蔵鏡』の「漢式鏡　禽獣帯鏡

三一四　上方四乳怪神獣帯鏡　上方作竟眞大工長宜孫子」

東漢時代から三国時代とされ、このほかに「上方作」の出土は二例がある。

⑩大和政権が確立されていない時期に共同体の有力者が朝鮮半島（楽浪）からの流通ルートが入手したものが、長い時代を経て山崎町の経塚に納められたものではないかと推定される。

六、一石経の経塚について

銅鏡の出土を考える上で重要であり一石経の経塚について説明する。

肥塚義彪「山崎町野から経塚を発見」『宍粟郷土研究会報』十八号によると、「山崎町野二二二番地の二、角江房治氏所有の田より経塚一基が見つかった。同氏が田のあぜ道を拡張中のところ……調査をしたところみつかった」とされる。

杉山洋『浄土への祈り　経塚を語る永遠の世界』によると、一石経の経塚は石にお経を書く。経石という小形の石を使うため一つの石に一字、まれに数字から数十字を書く。全体で万を数える石が用いられる。地面に大きな穴を掘り石を入れる。塚を造り石碑をたてる場合が多い。石碑には「大乗妙典一字一石」という文句が刻まれる。字数に見合う石を集めれば良い。法華経だけで題字を含めて六九六〇字ある。一石経の経塚があることからこの地を「塚之元」とされたのではないかと考えられる。

一石経は、①雨乞いの一石経も全国にかなりの数があるとされる。②冷害による飢饉のあった年に埋納する（山形県安久伊八幡宮）③疫病流行の際に病魔退散を祈る埋納（島根県塔婆堂）④暴風除けの一石経（長野県南祖木村）⑤海南防止（青森県階上町）などである。一石経塚は当時の庶民信仰の実態を知る貴重な資料とされる。

塚之元に経塚が造られたのは雨祈神社に近いことからも深い関係があることから雨乞いの一石経ではないかと推定され、一石経に獣帯鏡も埋納されたものであろう。

「上方作」獣帯鏡（兵庫県宍粟郡山崎町）
東京国立博物館所蔵　面径10.9cm

七、まとめ

今回の調査でわかったことは、①経塚からの出土である。②経塚は一石経である。③銅鏡が出土したこと。④二世紀後半の漢鏡である。⑤「上方作」の銘文がある獣帯鏡である。⑥長い時代を経て中世の経塚に納められたものではないかと推定される。⑦一石経塚は当時の信仰の実態を知る貴重な資料である、雨祈神社に近く、一石経塚は雨乞いのために造られたものではないかと考えられ、周辺の地形を鑑みると民間信仰とも深いつながりがあるように思われる。

八、おわりに

経塚から出土した貴重な銅鏡の資料を紹介するのに十余年これまで現地で何度も何度も立ち止まり調査を行った。塚之元に経塚があったことは言い伝えなどで知られていたことから記録に留めたいと思っていた。銅鏡については東京国立博物館に所蔵されていることから多くの先生が紹介されている。このたび東京国立博物館より平成十六年三月三日付け東博事特第一七七四号で写真掲載のご許可をいただいた。一石経の経塚については、三月一日に奈良文化財研究所飛鳥資料館[illegible]研究室杉山洋氏より古墳の上に経塚が造られる例もあるとご教示いただいた。また、獣帯鏡については『兵庫県史』考古資料編の作成で、大阪市立大学助教授の岸本直文氏にご教示いただいた。

今回資料を紹介させていただくのに地元の野自治会長北本毅氏、東本信治氏、細川繁美氏はじめ多くの方々にご教示いただいた。厚く御礼申し上げます。

細川繁美氏より現地を二〇〇一年四月六日にご教示いただいた。

東本信治氏のご教示によると、「塚[illegible]」であり、これまで後藤守一氏は「塚元」とされ、櫃本誠一先生は「塚の本」とされているが、「塚之元」の経塚からの出土である。

平成十六年二月二十日に野自治会長北本毅氏のご教示によると、「塚之元」は、城下小学校の通学路であり、「ごろつか」と地元では呼ばれている。古墳ではなく経塚である。小さい塚で小石に字が書いてあったという。経塚の発見されたところは現在は町道になっている。

櫃本誠一先生が言われているように、二世紀後半の製作から経塚への再利用までの間に変転があること、古墳の副葬品の再利用なのか、原鏡を型にとり踏み返し鋳造した鏡の可能性もあることなどを含めて今後の調査で解明できればと考えている。山崎郷土研究会員の皆さまのご教示をお願いしたい。

山崎町野塚之元出土の獣帯鏡についての参考資料を紹介させていただく。

①『山崎新聞』第五十六号　大正六年（一九一七）三月一日付け
②後藤守一「東京帝室博物館の新収品」『考古学雑誌』第十巻第四号一九一九　P238
③後藤守一『漢式鏡』一九二六　P315・P651
④鎌谷木三次『播磨出土の漢式鏡の研究』一九七三　P34・P306
⑤肥塚義尨「山崎町野から経塚を発見」『宍粟郡郷土研究会報』十八号　一九六四　P4
⑥岡村秀典「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』都出比呂志・山本三郎編　木耳社　一九九〇　三角縁神獣鏡以前　P14～23
⑦『兵庫県史　考古資料編』兵庫県　一九九二　P816図版八二　59　P872
⑧『安富町史　通史編』安富町・町史編集委員会　一九九四　P122
⑨杉山洋『浄土への祈り　経塚が語る永遠の世界』雄山閣　一九九四　P27～28
⑩櫃本誠一「誌上博物館五八　銅鏡の変転―山崎町塚ノ本経塚出土の四獣鏡―『兵庫県立歴史博物館ニュースNo六四』一九九八・一〇
⑪櫃本誠一『兵庫県出土の古鏡』真陽社二〇〇二・四・一〇　P358第4章出土鏡の研究　ハ・上方作獣帯鏡　図版70上

秋の研修旅行参加記

森本　一二

平成十五年秋の研修旅行は、九月五日の日曜日に行われた。本日の参加者は、三十二名で空席もあり、少し淋しい感じである。

八時、運転手さんの安全運転の挨拶があって、定刻に発車する。朝方少し心配になっていた空も、東へ進むに連れて明るくなって来た。楽しい一日になりそうだ。

私の朝の挨拶の後は、織金部長が準備をしてくださっていたビデオが写されはじめた。今回は、阪南と泉北の旅であるので、熊野街道や、奈良へ通じる竹内街道の案内が中心になる。

昨年秋の旅行では、紀州路に入り、藤白王子に上がりましたが、その熊野古道の起点が大阪だと云う説明から始まり、竹内街道では、二上山の名が懐かしく印象的でありました。

ビデオに見入っていると、いつの間にか環状線に入り、九時四十三分、四天王寺の鳥居の前に出た。道路脇にバスを停め、急いで下車し、西大門前に出る。大きな鳥居だ。この鳥居は発心門といい、永仁二年（一二九四）忍性が勅を奉じて石造に改め、高さ九メートル余、横幅七メートル余で、上部中央に額があります。何と書いてあるのかと読むのですが、私には分かりません。しかし、この門の真西に極楽があり、彼岸の夕日はこの門の中心に沈んでいくのだそうです。

四天王寺は、聖徳太子が推古天皇元年（五九三）に建てられた最初の寺であり、護国の神、四天王をお祀りされているのですが、また、敬田・悲田・施薬・療病の四箇院を持ち、信仰と救済、医療などの福祉施設を兼ね備えた総合的寺院であります。

中門を入ると、五重の塔、金堂、講堂が並び建ち、周囲には諸殿、諸堂が配置され、広大な寺域をなしています。千数百年の往古を偲びつつ、見学、散策すること約五十分、下車時の道路脇に集まるとバスが来て、次の住吉大社に向かい、十一時前、大社の駐車場に着きました。

四天王寺は明るく開けた広い寺域でしたが、この御宮は杜をなしており、大きな古い木々が社域を覆い、さすが摂津の国第一の御宮であると感じられました。

たくさんの石灯籠の中を進むと、大鳥居のある正面参道に出ました。この御宮も西面しているようで、大鳥居の向かう先は大阪湾で、瀬戸内海から西国へ続く海の起点にあるのです。

その海を表したのでしょうか、小さいですが細長い池があり、その中央に木の反り橋が高々と弧を画いて架かっています。この木の階段の橋は参拝する人々の足で、削り磨かれて滑りやすく、歩行には苦しいが、歴史の長さと重みを感じさせる文化財でありました。

橋を渡ると二の鳥居があり、その先は境内で、中に入るとあまり大きくないお社が一列に三つ並び、更にその横にも同じ様式のお社があり、今まで見たことのない珍しい御宮さんでした。

案内書によると伊邪那岐命が黄泉の国から帰られ、けがれを落とすため禊祓いをされたときにお生まれになった住吉三神と神功皇后の四柱の神々がお祭りされて、四本宮の御宮になっている、と出ていました。

そして今日はどうした吉日なのでしょうか。乳児の初詣りがたくさんあります。

おばあさんらしい中年の婦人が、前に乳児を吊り抱え、その後に、これも晴れ着の若者夫婦が従い続いて拝殿に進む姿は、まことにほほえましく、思わず『おめでとう』と声をかけずにはおれない状況を醸し出していました。

車に帰り、大鳥居の前を通りましたが、大きな石灯籠が重なり合うように立って居るのには驚きました。

船運に関係する人達が講を作り、競って大きな石灯籠をたてて、常夜灯料を寄進したので、お宮の辺りは明るく、夜の船路の案内をしたのでしょう。

バスは間もなく大和川を渡り、泉州へ入りました。

この川は、ワースト三の汚い水だと、ガイドさんの説明がありました。

更に地道をしばらく走ると、堺市役所前に来ました。時計は十二時になっていましたが、展望台でお茶をいただきに中に入りました。今日は日曜日で部屋は皆しまっており、人気がないがエレベーターは動いており、二十一階まで上り、喫茶室に入り、席に着く前に窓の外を見る。本当に高い、あまり孤立して高いので、恐ろしいほどである。ガラス窓には、ぐるりと周囲の案内図が描かれている。北面は大阪の市街・大阪城とあるが、かすんで見えない。東のガラスからは、二上山の二つの峰が丸い頭をそろえて仲良く並んでいる。若い日この地に遊び、万葉の悲歌に心を打たれたのを思い出す。

現身（うつそみ）の人なる吾や　明日よりは
二上山（ふたかみやま）を弟背（いろせ）と
吾が見む（巻二、一六五）

天武天皇の崩御による政争で、死を賜った大津の皇子は二上山の麓に埋葬された。これを悲しまれた姉の大来（おおく）の皇女の悲しみの歌である。

頂の高い方が、姉の皇女で、低くかわいい皇子の山に寄り添い、かばうように並んでいるのを見ると、こまやかな姉弟の情が通うのである。

出て来たお茶を飲んでいると、『西に出ると六甲山や明石海峡が見えるよ』と話しながら入って来た人があった。急いで外に出て、西に廻る。広い大阪湾の彼方、水平線近く、北から長く伸びている六甲山系が真西の方向で海に入り、伸ばした手の握りこぶし程の幅で海になり、また低い淡路の島影が、目の届く限り南に伸びている。

天（あま）ざかる夷（ひな）の長路ゆ恋い来れば
明石の門（と）より倭島（やまとしま）見ゆ
（巻三、二五五）柿本人麻呂

私は須磨辺りの車窓から、泉州の山を見ていつもこの歌を口ずさみ、その内『明石の門』と言うのに、違和感をもっていたのであるが、この塔の高みから望むと、明石海峡は全く大阪湾の『明石の門』であることがわかった。

隣の織金さんに双眼鏡を借りると、明石海峡大橋がはっきり見えるではないか、播州人の我々にとっては、まことにすばらしい眺めであった。

南西に廻ると、眼下の家や道は思い以上に小さく、その先やや離れて大きな森が占めている所、これが仁徳天皇陵である。大きいと言っていたが本当に大きい。

天皇が高殿に上り、民の竈から煙の消えているのをなげかれ、三年の免祖をされたと言う話しは小学校の歴史で聞いたのであるが、景気回復には雇用の拡大こそ大切と、一大土木工事を起こし、一日千人、四ヶ年もの御陵づくりをされたのだとすると、何か今日の経済政策の参考になるのでは……などと考えるのもおもしろいではないか。堺市役所展望ロビーはいろいろな物語をしてくれるすばらしい展望であった。

下に降り、バスに乗って仁徳天皇陵の駐車場に着くと、時計は一時を過ぎていた。車内で遅い昼食をとり御陵正面へと歩く。三百メートルに余る長い直線の掘割り、その中央部に橋があり、それを渡ると少し開けた所があり遥拝所になっている。その前も堀で、もうそうれよりは進めない。その先の大きな森の奥は分からないが、拝礼して引き返す。

御陵の前は広い道路である。信号を渡ると大仙公園で、木立の中をしばらく歩くと堺市博物館前に出る。白い大きな建物が林の中に立っている。

中に入ると年代順に、原始・古代から近世までの数多くの出土品や文化財、中世末の町並み模型や南蛮屏風などが次々と部屋毎に展示されている。

戦国時代の自由都市、鉄砲以来の堺の刃物、千利休を頂点とする茶の湯文化など、興味深く見て廻った。

そして私は与謝野晶子の歌も好きである。その内、

却初（ごうしょ）より作り営む殿堂に　吾も黄金の釘一つ打つ

『君たちどの道に進んでも、その道に黄金の釘を一本打つのだという自覚をもって励んでくれよ』と言って、担任の中学校三年生を送り出した日の事が思い出されるのである。

堺博物館を出て車に帰るとまだ三時過ぎであった。そのまま帰るには早いので、途中大阪空港に立ち寄り、一服休憩をとる。コーヒーを飲んで、少しばかりだが土産を買って車に帰りました。

心配した天気もよし、旅行計画もゆったりとして行き届き、一同安全・無事に加え、それぞれ自分流の研修が出来たことを感謝しながら、また次の研修旅行でご一緒しましょうと約束して家路につきました。

山崎町中井・段地区 埋蔵文化財確認調査について

山崎町教育委員会

当地区は、土地区画整理事業など今後様々な開発が想定されるために、事前に埋蔵文化財確認調査をすることとなった。

山崎町教育委員会が調査主体となり、宍粟郡広域行政事務組合調査員　片山昭悟氏が担当して実施した。

・山崎町中井・段は、山崎町南部であり揖保川支流菅野川の左岸に位置している。

・中井は、名前の由来になった中の井であり水利の重要な地点でもある。

・中井・段一帯は中井条里として知られ、一町四方の条里地割が今も多く残存している。

・中井の「田中神社」は「大神宮」とも呼ばれ、中井の中心に鎮座する。菅野川と中井字志水ケ坪の中間地点に位置している。

・中井の小字名には「寺ノ前」「寺ノ後（ご）」がみられることから、かつて寺院が存在していた可能性が高い。

過去の発掘調査をみると段字柳ケ坪周辺について昭和四十八年には中国自動車道建設に伴う確認調査が、兵庫県教育委員会によって行われた。

調査周辺における周知の埋蔵文化財包蔵地については、山崎町中井に奈良時代とされる中井条里、奈良時代から中世におよぶ散布地の中井第一散布地、平安時代の散布地の中井第二散布地、平安時代の散布地の段第五散布地が知られる。このことから兵庫県教育委員会社会教育・文化財課審査指導係の指導を得て確認調査を実施した。

確認調査は、調査対象面積二十四ヘクタールで平成十五年と平成十六年の二年に分けて埋蔵文化財の確認調査を行っている。計一二〇箇所のグリッド調査を実施することから、調査面積は四八〇平方メートルの予定である。

平成十五年は、調査区の西半分である段字柳ケ坪から中井字寺ノ前にかけて七十箇所を設定して、重機掘削による調査を行った。

平成十六年は調査区の東半分を中心に調査を行う予定である。

平成十五年の調査結果についておもな遺構、出土物などを略述する。

呉服とジュエリー
とくさや
本店　本町（さつき通り）62-1680
咲ランド３Ｆ呉服のとくさや　63-0568
〃　２Ｆジュエリーとくさや　63-0557

①条里地割について

中井条里地割についてこれまで時期は不明であったが、今回の調査で長池式地割が現存する段字柳ケ坪では、五～六時期の水田遺構がいずれの箇所にも顕著に認められた。中井字寺ノ前においても現水田を含めて五～六時期見られることが確認できた。段字柳ケ坪は、五～六時期の水田跡を検出した。粘土層に十二世紀から十三世紀頃の須恵器椀などの中世遺物が含まれることから中世にはすでに幾度も水田にされていたものであろう。周辺には奈良時代の遺物もみられることから、さらにさかのぼるものではないかとも推定される。

②弥生時代について

段字柳ケ坪において、弥生時代後期の壺、甕、器台（鼓形）などが出土した。G－4・G3・G12・G13で表土下六十センチ～八十センチ、幅二十センチ～三十センチの弥生時代の遺物包含層を検出した。段字犬ノ馬場から柳ケ坪にかけての微高地には、小規模ではあるが集落が存在するものと思われる。G26で表土下一五〇センチ～二〇〇センチで弥生時代後期の甕を含む包含層を検出した。G36で表土下一五〇センチで弥生時代後期の器台（鼓形）を含む包含層が検出した。G147は弥生時代の中期の壺（Ⅲ様式）口縁端部に円形浮文を施している弥生土器が出土した。中井から段にかけて弥生時代の中期と後期の頃にすでに人々が住んでいたものと思われる。

③中世の寺院跡について

今回の調査で、中井字寺ノ前の構内より波状文軒平瓦を採集した。今里幾次「小野市長尾寺跡出土の古瓦」『播磨古瓦の研究』一九九五によると、長尾寺Ⅱ瓦タイプであることから、室町時代の十四世紀末とされ、流水文的波状文と呼ばれる。播磨地方では小野市長尾寺、三木市正法寺で出土している。このほか付近の構内から三巴文の軒丸瓦片、縄目叩き文の平瓦片や丸瓦片が出土している。中世寺院跡については、明確な調査ができなかったところもあり、寺院の規模や構造については十六年の調査において追求したい。東方近くに白鳳時代の創建とされる千本屋廃寺跡があることから関連するものであろう。

④揖保川と菅野川の氾濫による堆積層について

調査地区には、中井字志水ヶ坪から下（した）ヲサ、烏田（からすだ）から鶴木字中井ノ前、下荒神にかけては、揖保川の氾濫した形跡がみられ旧河道と推定される。また、中井公民館周辺から段字中井ノ前にかけて道路より西は菅野川の氾濫の形跡が見られた。

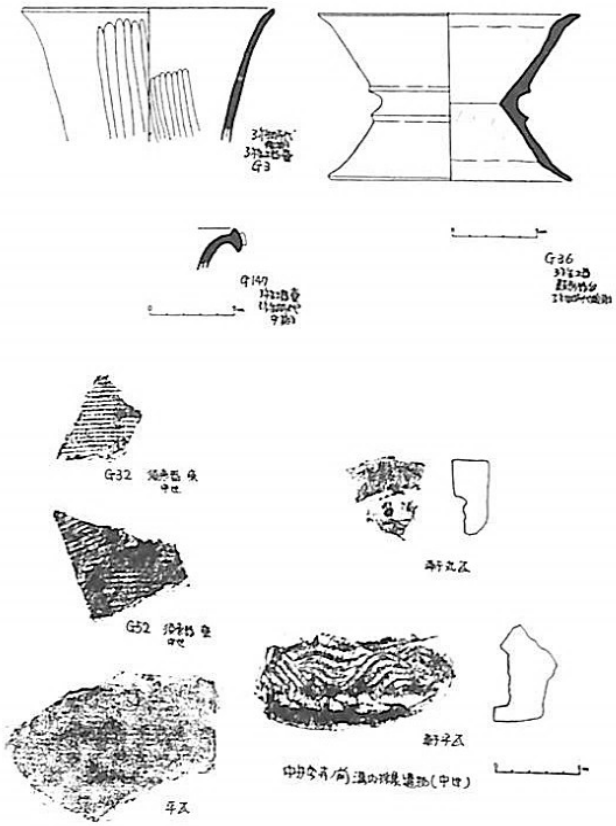
外科・内科
山中医院
院長 山中陽一
山崎町西町・TEL(62)0036

（まとめ）確認調査でわかったことをまとめる。

①弥生時代中期、後期には人が住んでいたことが確認できた。周辺に集落跡が存在する。

②中井条里地割の調査が確認できた。水田跡は中世に遡ることが確認できた。奈良時代に遡るのではないかとも考えられる箇所もみられた。

③中井字寺ノ前には、中世の寺院跡があったことが出土した瓦から今回確認できた。平安時代から室町時代にかけての寺院跡が存在していたものであろう。



出土遺物実測図

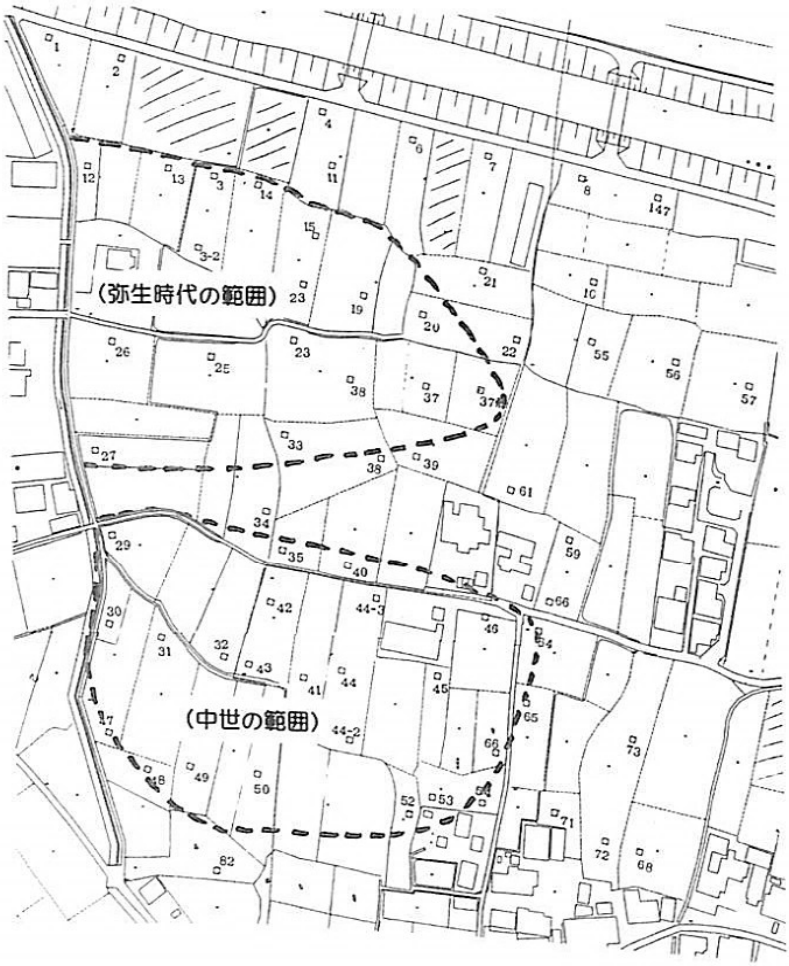
④中井字寺ノ前から段字中井西にかけて奈良時代・平安時代から室町時代にかけての遺構が広がることが今回確認できた。揖保川や菅野川が流れていたこと。氾濫による堆積がみられる。

⑤中井の名前について井に関連する村名である。

⑥出土遺物は、特徴的な遺物が出土した。

弥生時代中期の壺（Ⅲ様式）口縁端部に円形浮文を施している土器が出土した。弥生時代後期の特徴をもった鼓形器台が出土した。

（片山）



事務局便り

事務局

☆名誉会長・顧問の変更について

名誉会長に高嶋町長、名誉顧問に大西教育長にお願いしまして快諾を得ました。

壷阪壽顧問が逝去されまして、顧問が一人になりましたが、文化協会の会長に就任された方にお願いすることにしています。

☆平成十六年度の総会は、二月二十二日午後一時半より山崎防災センターにおいて、二十五名の出席を得て開催しました。

総会は例年の通り、平成十五年度事業報告から会計決算報告監査報告、十六年度事業計画及び予算案を決定しました。

本年は役員の改選時期ではありませんが、部会の委員に変動がありましたので、承認をしていただきました。

総会の記念講演は千種町の伊吹昭（岩蕗昭美）氏にお願いして、「真賢のスギ」と題してお話をいただきました。

☆委員の変更について

山崎北地区支部長の横野一男氏が伊野操治氏に替わられました。

研修部　金山　敞史さんに加わってもらいました。

史跡部　横野一男さんが伊野操治さんに替わられました。

☆現在の会員数は三百九十九人となっています。皆さんの協力で少しでも増加の方向にお願いします。

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-2576　兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL(0790)62－7588
FAX(0790)62－7589